

新・碧い彗星の一夜

北村
想

登場人物

猿全弁吉（御存知、チンドン屋さん）

六（その息子、高校三年）

デン子（娘、十六歳）

トメ子（猿全さんの奥さん）

新藤（下宿人、四十前後の同人誌作家）

大岡（下宿人、二十半ば）

遠山（下宿人、大岡と同居二十半ば）

定吉（猿全さんところの従業員、クリスチャン）

マリア（下宿人、二十代らしいが・・・水商売の女）

明子（新藤の妻）

土師沙羅（はじさらと読む。新藤と同じ同人誌作家）

イエズス聖書会の人々

牧師の神谷

その妻

信者 1・2・3

ミネオ（いつものあの少年）

キンノスケ（ミネオの友人）

老人（老人語りべの会の老人）

ミネオの母

1 彗星Xと家庭の事情・チンドン屋猿全弁吉の思案

和やかなホームドラマでも始まるかのように聞こえてくるナレーション。作者はあの『ちびまる子ちゃん』のあれをイメージしているのだが。・・・

ナレ「猿全弁吉はチンドン屋である。

おそらく日本ではもう数少なくなった街頭宣伝業の人である。

血のつながりはないが、彼には子供が二人ある。六という名の男とデン子という名の女である。六は十八歳、高校三年になり、デン子は十六歳の乙女となった。難しい年令にさしかかっていたわけである。

六は成績優秀で、このまま大学に進もうとしている。デン子は学業が兄ほどではなかったので、家業を手伝っている。

問題はデン子だ。

猿全さんは街頭宣伝業が零細になってきたので、副業に下宿屋を始めた。二階の二部屋と離れを貸して家計の足しにすることにしたのである。幸い間借り人はすぐに見つかった。

二階には現在、働きながら演劇を学んでいる青年が二人と、水商売の若い女性が住んでいる。離れには自称作家と名乗る男とその妻が住んでいたが、事情があるのか妻はこの一月ばかり実家に帰っていて姿を見せない。

この自称作家の新藤四郎とデン子の仲が最近妙なのである。

今夜も新藤とデン子は出掛けたらしく、もう時計の針が十二時になろうというのにもどつてこない。猿全さんは卓袱台を前に腕組みをして渋い顔だ。

つきつぱなしのテレビからはその日最後のニュースが流れていた。巷で話題の『彗星X』のニュースである。どうやらこの彗星が地球とぶつかるらしいのである。・・・

テレビの声「(小さく雑音が交じりながら) 続いて先程もお伝えいたしました長周期彗星

Xに関連したニュースです。彗星軌道面と地球軌道平面黄道面との傾斜角が殆ど同じということから、彗星Xが地球と衝突するのではないかという憶測が、一部天文学者のあいだで取り沙汰されている噂について、日本天文学物理地学協会はこの噂が事実であることを本日発表いたしました。しかしながら日本天文学物理地学協会はこの事実を認めた上で、現在の計算によると0.08天文単位ほどの距離で衝突は回避できるだろうという見解にたっておりません。いずれにせよ、現在スーパーコンピュータにより解析がすすんでいるので、この結果をみなければハッキリとしたことは述べられないということでもあります。

問題は、この彗星が非常にあやふやな速度と軌道をとっており、確率でしかそれが計算出来にくいところにあるようです。次のニュースです。愛知県の熱田動物園で今日『ぬらりひよん』の赤ちゃんが初めて人工的に誕生しました。『ぬらりひよん』は日本では死滅しているとみられていた『ゆらりぽん』と同類の、学名を『ツルリンピオン』というぬらりひよんとした生物で――

猿全、無然とした表情でテレビのスイッチを切った。

おかみさんのトメ子がおろおろしながら顔を出した。

トメ子「・・・お前さん、茶漬でもつくろうかい？」

猿全「いらねえ。

トメ子「だってお前さん、夜ちゃんと食べてないじゃないか。

猿全「いらねえたらいらねえ。

時計が十二時を打った。

トメ子「お前さん、もうやすまないと、明日早いんだろ？」

猿 全「おめえ、先に寝ろ。」

トメ子「そんなこと言ったって。」

所在なさそうなトメ子。

猿 全「ああ、おい、

トメ子「え？」

猿 全「茶漬もらうよ。」

トメ子「そうかい。そのほうがいいよ。何かおなかに入れとかなきゃ、何だって悪いほう

悪いほうに考えがいくんだよ。おなかが減つてると人間てのは、

猿 全「うるせえな、ゴタゴタ言っつてねえで早くつくらねえか。」

トメ子「梅かい？ 鮭かい？」

猿 全「どっちでもいい。」

トメ子「決めとくれよ。」

猿 全「じゃあ、シヤケだ。」

トメ子「鮭だね。（引っ込もうとして）あつ、駄目だ。」

猿 全 「何が？」

トメ子 「鮭は二階の大岡と遠山さんが持ってたんだ。

猿 全 「梅でいいよ、梅で。まったくもう、俺はそんなものどっちだっていいんだ。

トメ子 「じゃあ、梅茶漬おおいそぎでつくるから。

猿 全 「いそがなくなつたっていいや。

トメ子 引つ込んだ。

猿 全 「(柱時計の発条を巻きながら)・・・んんんもう、まったく何処をほつき歩いてやがるんだ。シンデレラだって十二時にやけえって来るんだぞ。

表の戸が開いた。

猿 全 「おっと、やっと、けえってきやがったか。

ところが帰ってきたのは使用人の定吉である。

定 吉 「親方遅くなりました。ただいま帰りました。

猿 全 「なんだ定吉か。またアーメンの親睦会か。

定 吉 「へい、例の彗星のことで今夜は話がもりあがりまして、もう侃々諤々、これを英語

で申しますと out spoken statement ラテン語で言いますとオウトス
ポケンスタート――

猿全「どうでもいいよそんなこたあ。

定吉「鍵が開いててほっとしました。鍵どうします？かけときますか？

猿全「開けといてくんな。

定吉「へい、そうですか。

猿全「いや、もう閉めろ。

定吉「え？閉めるんですか？

猿全「いや、やっぱり開けとくか。

定吉「へい。

猿全「いや、癖になるといけねえ、今夜は閉め出してやるか。

定吉「閉めるんで？

猿全「いや、そんなことしたら、離れに引つ張りこまれるなんてことにもなりかねえ。

やっぱり開けといてくんな。

定吉「(察したらしく)お嬢さん、まだなんですか？

猿全「それがどうしたってんだ！

定吉「いえ、何も。

猿全「ちえっ、おめえにアタったって仕方ねえや。・・・

定吉「・・・新藤さんと御一緒？

猿全「(怒って) そうだ！

定吉「(首を竦めた) うへっ、とぼっちりトバツチリ。あつしはもう寝ます。

猿全「おい定公、

定吉「へい？

猿全「つかぬことを聞くが、

定吉「へい。

猿全「・・・いや、もういい。何でもねえ。明日早えんだから、もう寝てくれ。

定吉「へい。じゃあ、おやすみなさい。

定吉、奥へ引つ込むのと入れ替わりに、二階から大岡と遠山が下りて来る。

大岡「あれ、大屋さん今夜は夜いっぱりですね。

猿全「(大岡の顔が赤いので) また飲んでるな。

大岡「なあに、安物の焼酎ですよ。おかみさんにシヤケの切り身貰ったんで、そいつを肴にこいつといつものように寝酒をやってたんです。

猿全「何か用事かい？

遠山「(インスタント・ラーメンの袋を見せると) ラーメンです。腹減っちゃって、ちょっと台所お借りしようと思って。

猿全「そうかい。まあ、勝手にやんな。

遠山「台所だけにお勝手にやります、なんちゃってね。

猿全「(無然としている)

大岡「何だか大屋さん、御機嫌悪いですね。どうかしました？」

遠山「今月はちゃんと入れましたよ。(家賃のことを言ってる)

猿全「何でもねえよ。

大岡「そうですか。じゃあ、ちよつと台所お借りします。

猿全「ああ、あの。

大岡・遠山「え？」

猿全「いや、あの、・・・離れの新藤さんのことだけどな。

大岡「ああ、あの作家の先生。

猿全「ああ。あの人、どういう人なんだ。

大岡「どういうって・・・(遠山を見た)

遠山「作家なんじゃないんですか？」

猿全「だから、どういう作家なんだって聞いてんだよ。俺はそっちの方はさっぱり分から

ないんだ。お前さんたちその、芝居をやってんだろ。

大岡・遠山「ええ。

猿全「だったら、ちよつとは分かるだろ。

大岡「そうだなあ。・・・新藤四郎なんて作家の本は見たことないな。

遠山「作家というのもピンからキリまでありますからね。同人誌か何かに書いてるんじゃないですか？」

ないですか？」

猿全「ドウジンシ？てえと？」

遠山「何というか、その志を同じくするような人々が集まって、本を出して、自分の作品

を发表或したり批評しあったりするんです。

猿全「それは銭になるのかい？」

遠山「さあ。・・」

大岡「金にはならないと思いますよ。まあ、僕たちの芝居と一緒にですね。

猿全「それで食ってはいけねえってことだな。

遠山「そうですね。

猿全「お前さんたちと五十歩百歩なわけか。

大岡「（不承ながら）・・まあ、そうですね。

猿全「奥さんはまだ帰ってこないのかい。

遠山「みたいですな。

猿全「あそこの夫婦はどうなってるんだ。

大岡「さあ、そこまでは。

と、玄関から声がする。二階の住人、水商売のマリアの声だ。

マリア「別れるんじゃないの。

マリア、ずいぶん酔ったの御帰還だ。

マリア「別れるって言ってたわよ新藤さん。

大岡「おや、マリアさん、今夜は早いですね。

マリア「まったく、彗星がどうしたこうしたで客なんか来やしないんだから。今夜は早仕

舞いのヤケ酒よ。ちよつと、大岡さん、水一杯ちようだいよ。

大岡「はい。(台所に行った)

遠山「おっと、ラーメン、ラーメンと。(大岡に続いた)

猿全「別れるって離縁するってことかい？

マリア「そうよ。あの作家先生、うちのお店で飲んでた時そう言ってたわ。

猿全「あんたの店によく行くのかい。

マリア「常連ってほどじゃないけどね。

猿全「そうか。・・・それで、離縁の話なんかしてたのかい。

マリア「そう、そう言っ私を口説いたんだから。スケベよあいつ。

猿全「なっ！なんだって、あんたを口説いた！？」

マリア「お尻撫でたりするんだもん。

猿全「し、尻を撫でた！

マリア「あの先生、悪いお酒なのよ。

猿全「いつもそうなのか？

マリア「そうね。たいていそうなるわね。安いお酒しか飲まなくせに、酔っぱらうの早

いんだから。いや、あれは、酔っぱらっているふりしているだけかも知れないわね。酒の上のことだったら何だっ許されると思ってんじやないの。そういうのって未だにいるのよ。でも、奥さんと別れるってのはホントみたい。

猿 全 「不仲になるようなことでもあったのかい？」

マリア 「さあ、でも、これは私の勘だけだし、あの人きつと奥さんに愛想つかされたのよ

。だって四十にもなって文学がどうだの、小説がどうだのって、気味が悪いわ。このあいだも、お店の女の子つかまえて、・・僕は知ってるんだぜ、君は僕のことを好きなんだろ。かくさなくたっていいさ。キスしてやろうか。どうだい、僕と一緒に墮落してみないか。・・なんて言ってるの。気取ってるところだけ作家なんだから。あれじゃあ奥さんだってたまないわよ。

猿 全 「そ、そうかい。そんな奴なのか。

大岡と遠山が鍋をもって慌てて飛び出てきた。

マリア 「なあに？どうしたの？水は？」

大岡 「出た。出ましたよ。

猿 全 「出たって？」

遠山 「(幽霊の手つきをして) これですよ。

マリア 「お化け？台所に？」

ところが、入ってきたのはトメ子だ。

トメ子 「誰がお化けだよ。私だよ。

猿 全 「何だお前か。

マリア 「なんだあ。

大 岡 「だって、真っ暗な台所で井もってつつ立ってんだもの、妖怪どんぶり婆かと思いましたよ。

トメ子 「お茶漬つくってたんだよ。

猿 全 「ずいぶんかかったじゃないか。

トメ子 「忘れてたんだよ。

猿 全 「何を？

トメ子 「作者がさ、私がお茶漬つくり台所にたつたことをずっと忘れてて、あんたたちに話させてたんだよ。

猿 全 「それで、ずっと待ってたの？

トメ子 「そうだよ、いつ出番が来るかいつ出番が来るかって、こうやって井抱えて待ってたんだよ。

マリア 「なあんだ。よくあることじゃない。

トメ子 「でもね、そういうふうに言ってしまうえば身も蓋もないだろ。だからね、こういう

ふうにしとくんだ。私はね、みなさんの話を聞きながら、デン子の身を案じて、このお茶漬をいつ出そうか、いつ出そうかとあぐねて台所に佇んでいた。どう？

猿 全 「うん、それなら立派に芝居になる。

マリア 「デン子ちゃんどうかしたの？

トメ子 「(猿全の顔を見た)

猿 全「ちえつ。

マリア「ははーん、デン子ちゃんまだ帰ってきてないんだ。

猿 全「知るけえ。

大岡「へーえ、そうなんですか。

遠 山「遅いですね。

マリア「それで、新藤先生が御同伴なんだ。ズバリでしょ。

大岡「え！

遠 山「そりゃ、由々しき事態だ。

マリア「あの作家先生、今晚もうちのお店に寄ったのよ。

猿 全「え、まさか、

マリア「一人でよ。

猿 全「そうか。

マリア「クイツと一杯ストレートで飲んで、・・・今夜は女を待たせてるんだ。僕はこれで

失敬するよ。困った困った、処女には気をつけたほうがいいな。ありやあ、始末に終えな

いな、へへへ。・・・だつてさ。

猿 全「ちくしょう！（立ち上がった）

トメ子「あ、あんた、おちついとくれよ。ほら、お茶漬。

猿 全「（震えながら座った）ただじゃおかねえぞ。（茶漬を食い始める）

と電話が鳴った。

大岡「あ、電話だ。

遠山「デン子ちゃんからじゃないですか？

トメ子「・・・あんだ・・・

猿全「・・・

大岡「出ましようか？

マリア「私が出たげるから、大岡さんお水持ってきてよ。

大岡「ああ、はい。そうだ、ラーメンなんだ。

遠山「そうそう。ラーメン、ラーメン。この調子じゃ作る前にのびてしまうよ。

マリアが電話を取り、大岡と遠山は台所に引っ込んだ。

マリア「はい、もしもし猿全宣伝社です。私？マリアです。え？マリアよ。そんな馬鹿な

なんて言われたってマリアだもん。誰あんだ？・・・イエス？何よそれ？・・・え？定吉？

定吉を呼ばいいのね。オーケイ。・・・(トメ子に) 定吉さん居る？

トメ子「今夜は定吉さん出かけて、

猿全「定ならさつき帰ってきたよ。

マリア「定吉さーん、定ちゃーん、定ぼう、お電話よお。

定吉、慌てて出てきた。

定吉「あい、すみません。何処からですか？」

マリア「イエス様よ。」

定吉「イエス様？（首をかしげながら受話器を取る）もしもし・あぁ、何だ。どうした

んですかこんな遅くに。（受話器の口をふさいで、猿全たちに）すみません、イエズス聖書研究会の人です。・・あぁ、もしもし、え？テレビ？テレビがどうしたんです？ニュース速報？・（猿全に）あの、すみません、ちよつとテレビつけていいでしょうか。何かニュースらしいんです。

マリア、スイッチを入れた。

テレビ「——彗星評論家の大高地さんの御意見でした。ではもう一度くりかえして日本

天文物理地学協会、ならびに日本宇宙学会の緊急共同発表のニュースをお伝えいたします。地球との衝突が懸念されておりました『彗星X』のスーパー・コンピューターによる軌道解析の結果、衝突の確率は85%という高い数字になりました。ただし、これはあくまで確率に過ぎないので、衝突が回避される可能性も大いにあるとあります。くりかえしお伝えいたしますが、『彗星X』は85%の確率で、およそ四日と13時間後、地球と衝突する可能性が出てまいりました。次の彗星関連のニュースは午前一時からお伝えいたします。つづきまして熱田動物園の『ぬらりひよん』のニュースです。

マリア、スイッチを切った。

マリア「ウソでしょーお、ほんとにぶつかるのお？」

猿全「ぶつかるったって、たいしたこたあねえんだろ？」

定吉「(受話器に) はい、見ました。ええ、ええ、そうです。そうですね。え！これから

?今からですか?え?、もうこっちに一部向かっている。あらら。(猿全に) すんません

親方、研究会の連中が緊急会議を持ちたいっていうんですが。

猿全「今から出かけんのかい？」

定吉「いえ、それが、こっちにみんな来るらしいんです。

トメ子「ここへ？」

定吉「はい。何しろこんな時間ですし、会場なんてありませんし、みんなが集まれるよう

な広い場所がないもんですから、

トメ子「だからって何も、ここへ来るこたないんじゃないの。

定吉「それが、今月は私、当番なもんで。(頭を下げる) すんません。

トメ子「あんた。・・

猿全「しよ、しようがねえな。(二階を伺って) うちには受験生がいるんだから、できる

だけ大人しく頼むよ。

定吉「ええ、そりやもう、飲んで騒ごうってんじゃないですから。ただのお話し合いだけ

ですから。

トメ子「何の話し合いだい？」

定吉「あれ？もう来たのかな。（出向く）

大岡と遠山がラーメンの入った鍋を片手に台所から戻ってくる。

大岡「馬鹿としか言いようがないな。この味オンチ。

遠山「何を言ってるんだ。なんたってインスタント・ラーメンとくれば明星のチャルメラにとどめだよ。

大岡「違います。エースコックのワンタンメン。ねえ、大屋さんそうでしょ。

猿全「おら、そんなものは食わねえよ。

大岡「そうですかあ、これは資本主義の残すべく最大の遺産だと思うんですがねえ。うん、うまい。天下第一だ。

遠山「うーん、グルメだなあ。

トメ子「どうでもいいけど、座って食べなよ。

大岡「じゃあ、失礼して。

マリア「大岡さんお水は？

大岡「あ、しまった。すみません、持ってきます。

マリア「いいわよもう。

定吉戻ってきて、

定吉「あの親方。」

猿全「ん？」

定吉「お嬢さんなんですけど。」

猿全「え！」

トメ子「デ月子なのかい？」

定吉「へい。」

猿全「あれも一緒か？」

定吉「あれって？」

マリア「新藤さんよ。」

定吉「へい、そのようです。」

トメ子「あんた。・・・」

猿全「馬鹿、おたついてねえで、ここへ連れて来い。」

トメ子「やだよ、短気おこしちや。」

猿全「分かってら。」

大岡「(空気を察して) じゃあ、僕たちは二階で。」

遠山「そうだな。」

猿全「いや、大岡さんも遠山さんもここにいてくんな。先方がわけの分からんことを言い

出したりしたら、あんたたちに助けてもらわなきゃならねえ。

大岡「でも、家庭の事情に他人が。」

遠山「そうそう。」

猿全「大屋と店子といえれば親子も同然だ。あんたたちの意見も聞きてえ。俺あこう見えても民主的なんでえ。

トメ子に引率されて、デン子と新藤が入ってきた。
その後に目つきのよくない男が一人、くつついている。

デン子「ただいま。・・

猿全「座んな。

デン子「あのね、お父ちゃん。

猿全「何でもいいから、座れってんだよ。

新藤「猿全さん、実はですね、急なお話がありました。

猿全「俺にだって話はあるんですよ。新藤さん、あんたも座ってくんない。

新藤、デン子、座る。

猿全「（もう一人の男を見て）そちらは？

新藤「ああ、これは僕の作家仲間です。土師沙羅というもんです。

土師沙羅「土師沙羅です。新藤くんにはお世話になってます。今夜は僕が無理に誘いまし

て、こんなに夜遅くになってしまいました。お嬢さんのことでさぞや、御心配をおかけしたと思いますが、

猿 全「ええ、ええ、御心配しましたよ。

デン子「お父ちゃん、あのね、

猿 全「お前の話は後で聞く。まず、俺から聞いてえ。ねえ、新藤先生、言われなくったつ

て先生は作家先生なんだからお分りになると思うんですが、十六の娘をです、

土師沙羅「(卓袱台にお茶漬を見つけて) あれ、それって梅茶漬じゃないですか？こりや

いいや、僕はね、お茶漬には目がないんです。いただいてよろしゅうござんすかね？

猿 全「俺の食い残しだよ。

土師沙羅「かまやしません。

トメ子「お茶漬なら新しくつくりますよ。

土師沙羅「いや、それにはおよびません。奥さん、どうか気をつかわないで下さい。なあ

に、残りモノには福つていきますから。いただきます。(食べはじめ)

猿 全「(気をそがれたが)・・・ですからね、新藤さん、デン子はまだ十六の娘なんです

よ。まだ何にも知らねえ、その何というか、えーと、うーん、

定 吉「ピュアというか、イノセントというか、です、ね親方。

猿 全「何だよそりや。

定 吉「無垢なということです。

猿 全「そうかい、そうね。そうです、そのぴあで胃の酸なんですよ。

土師沙羅「うん、やっぱり茶漬は梅だな。茶漬に梅干しというのが日本人の原点だな。

猿 全「そのイノサンの原点をですよ、・・・え？何だと？(急にこんがらがってしまった

らしい) おいトメ子、

トメ子「何を言っただよお前さんは、もう。あの、新藤先生、私どもの娘とはどういう

お付き合いなんでもございましょうか。十六といってもやっぱりまだ子供なものですから、
ちよつとこの時間まで連れ歩くのは、・・・

新藤「それについてはですね、お母さん、

猿全「お母さん？新藤さん、あんたにうちのやつをお母さん呼ばわりされる義理はねえ。

新藤「ええ、はい、それじゃあ、新藤さん、

登場人物、各々やや動揺する間がしばしあって。

猿全「新藤はあんただ。

新藤「え！（赤面して）ああ、失礼しました。えーと、（ますます赤面して）

猿全「俺は猿全だよ。

新藤「ああ、そうでした。猿全さん。（動揺かくせず）えーと、なんだっけ。

土師沙羅「（新藤の台詞忘れを助けんとして）うーん美味かった。これは天下一のお茶漬

だった。よし、お礼に一句詠もう。『新藤の次の台詞の始まりはたしか今夜はお嬢さん』
・・・（ちよつと踊っている）

新藤「ああ、そうだ。今夜はお嬢さんのデン子さんと大切な話がありまして、率直に言い

ますと、それは人生における重大な決断といえますか、二人の今後についての重要かつ慎重なる生活設計の指針ともなる判断をしなければならぬ、つまり、人生というのは単調に見えてこれが波瀾にとんだものであるという実感を私たちは互いに認識しあつたのです

が、何というのでしょうか、愛というものは嵐のように、空の一点に滲み出た雲が全天にあつという間に広がるものではないでしょうか。その情熱の速度は理性の鎮圧を・かに凌ぎ、ただそれを結果のみで判定するにはあまりにも人間は不可解であるといわねばなりません。

トメ子「(猿全の顔を見る)

猿全「何だつて？」

新藤「ですから、私とお嬢さんとは、対なる幻想を互いに意識し始めて今日にいたったわけ

けなのですが、その欲望に忠実にならんとした為に、愛の結果をみたわけなのですが、
マリア「要するにあれなんでしょ、恋愛してるんですよ。

新藤「俗に言えばそうなるでしょう。しかし、恋愛はまた肉欲の詩的表現でもあるわけですから、それに付随して、

マリア「寝たわけね。

新藤「分かちあう情熱の熱きほとばしりはついに二人の身体を一つにし、

マリア「やっぱり。

トメ子「あ、あんた。お前さん。

猿全「す、すると何ですかい新藤先生、あんたはデン子と、その、男女の、その、あれをやったというんですね。

新藤「端的に言いますとそういうことです。

猿全「そういうことも、へったくれもないや。それで何ですか、うちの娘を嫁にもらつてくれるんですかい？」

トメ子「あんた、何もそんな。

定吉「親方、そりゃ飛躍ですよ。

猿全「百も千もねえ。娘をキズ者にされたんだ。そう言うしかねえじゃねえか。

新藤「結婚は恋愛の墓場であるとは承知ながら、・・・

マリア「ええ！結婚するの？

新藤「私も責任というものについては考えがあります。

トメ子「だって新藤さん、あなた、奥さんどうするんですか？

新藤「あれにはもう何の未練もありません。

トメ子「そんなこと言われても、デン子はまだ十六ですよ。

新藤「若いということは人生の宝石です。

猿全「宝石だか何だか知らねえけど、うちのデン子はまだ子供ですぜ。

デン子「お父ちゃん、私もう大人よ。

猿全「うるせえ、花嫁修行もろくにしてねえ娘が、何が結婚だ。

デン子「いま、嫁にもらえて言ったじゃない。

猿全「聞いてみただけだ。やるとは何も言ってるねえ。

トメ子「デン子、お前、結婚っていうことがどういうことなのか、分かってんのかい？

デン子「分かってるわ。

猿全「いや、分かってねえ。結婚というのは、ただ好いた惚れたでやるもんじゃねえんだぞ。

ぞ。その男と一緒に暮らして、その男の子供を育てるといことなんだぞ。

デン子「だって、私、妊娠してるのよ。

あれま！という弾けた空気。

新藤「実は、本日産婦人科を訪れましたところ、懐妊のようすで。

猿全「（泡吹いて引っ繰り返った）」

大岡と遠山、猿全を助け起こす。

マリア「おかみさん、水、水！」

トメ子「あ、あいよ。（台所へ走る）」

土師沙羅「いやあ、メデタイ。めでたいじゃないか諸君。猿全デン子くんは新藤夫人とな

るわけだ。こりや君、将来は作家夫人だぜ。万万歳だ。大団円だ。ハッピーエンドだ。（大岡と遠山のラーメン鍋を手にして、残ったスープを飲んでみる）うん、こっちはエースコックのワンタンメン、しいたけの香りだ。こっちがチャルメラ、スパイスが決め手ですな。なかなかのグルメとお見受けしました。

大岡・遠山「どうも。」

トメ子「お前さん、水だよ。しっかりしとくれ。」

猿全「・・・ふーっ。」

新藤「妻はもう実家にもどっておりまから、実質的には印鑑ひとつで処理できる関係でしかないわけです。」

マリア「その奥さんて、新藤さんとデン子ちゃんのこと知ってんの？」

新藤「日本家屋様式の悲劇の一端と申しましょるか、私とお嬢さんの愛の契りをあれが偶発的に目撃したのが、事の始まりであります。

マリア「テゴメにしてるところを覗かれたんだ。

猿全「そ、それじゃあ、何ですかい。あんたの奥さんが実家に戻った理由ってのは、うちのデン子と、その、デキたというか、それを知って。・・・

新藤「いやあ、まったく、女というものはしょうのない動物ですな。はっはっは。

マリア「新藤さん、あなた仕事ないんでしょ？奥さんに食べさせてもらってたんじゃないの？この先デン子ちゃんとどうするつもり。

新藤「それはですね、

デン子「私、働くから。

新藤「これが、そう言ってくれるもんですから。

マリア「冗談じゃないわよ。身重なんですよ。

デン子「大丈夫、私、若いから。

新藤「と、申ししてくれますんで。

猿全「（もう眩暈がしている）ああ、俺あもう目の前が真っ暗だよ。

トメ子「（泣き出す）

マリア「おかみさん。しっかりして。こんなやつにデン子ちゃんやったら駄目だよ。

土師沙羅「いや、いやいやいや、あながちそうとは言えませんよ。猿全さん、この新藤く

んはですね、我々の同人誌『熱血文芸』の中でも最も将来が有望視されている作家であり

ます。末は直木か芥川、売れっ子になることは間違いありません。このあいだも、日本の同人誌協議会主催によります同人賞の最終候補に残りました。

新藤「(やにさがって) まあまあ土師沙羅くん、そのことはいいよ。

土師沙羅「(ますます勢いついて) いや、この新藤四郎こそ、日本の文学界、文壇を背負

ってたつ人物なのであります。もうお読みになりましたか『隣の門』これは千枚にも及びながら、未だ完結をみない大長編小説であります。ある日隣の家に門が出来るのであります。その門をめぐって壁ひとつ隔てた家どうしの骨肉の争いが展開されるのであります。この書き出しがまたよろしい。『隣に門が出来た。それは誰のもんだ？隣のもんだ』こうです。これは現在の住宅環境問題から家庭内のさまざまな問題を照射した異色の作品といえます。それからこれはもう是非お読みいただきたいのが『おおボケ一代』完全に惚けてしまった老人が次々と犯す猟奇犯罪。私はその書き出しを覚えております。うほん、『後藤慎太郎はボケであった。真言密教のようにボケた。どろんとしたトコロテンを垂れ流した朝のように突如ボケたのである』見事です。同人賞の最終候補になったのは『ピグモン族のシーサイドにて』という小説で、これはやがて登場するに違いない風俗を予見している前代未聞の実験小説です。こいつの書き出しはですな、『群青色のパンツがはきたい。若者たちはシーサイドに戯れてそう思うのだ』・・・よろしいですな。

新藤「まあ、そういう具合にいろいろと書いてはいるんですが。

マリア「お金にはならないのよね。

土師沙羅「投資だよ君、将来の大金脈に投資するつもりで我輩も彼とつきあっているんだ

。今夜も我輩の奢りで飲んだんだからな。

大岡「土師沙羅さんは作家で食べてらっしゃるんですか？」

土師沙羅「我輩は君、下水工事の下請けをやっておる。新藤くんは我々の誇りだ。希望の

星だ。羨望の的なんだ。そんな新藤くんと一緒になれるなんてことは、デン子ちゃん、君はほんとに果報者だよ。

デン子「はい。」

マリア「どうだかね。」

デン子「恋愛は人生の花なのよ。花の下には風が渦巻いているばかりだけど、さよならだ

けが人生の中にあって、恋愛だけが運命の細い糸で男と女を結んでいるんだって。

マリア「そんなことをこいつが言ったの？」

デン子「だって、私もそう思うもの。」

猿全「大岡さん、遠山さん、あんたたちはどう思う？」

大岡「そ、そうですね。」

遠山「まあ、そういうことは当人どうしの問題ではあるでしょうけど、この場合、客観的に見ると・・・」

土師沙羅「君たちは知らんのだなあ。新藤くんの最近作はね、『人生これが花』という人

の生きることの何であるかを説いたエッセイなんだ。これがまたいいんだ。第一章が『愛することを恐れるな』だ。これはだね、行動主義心理学にもとづいた恋愛論とでもいうべきものなんだなあ。

玄関が開いて、ざわめきがする。

定吉「あ、聖書研究会の連中来たようです。あの、あがってもらっていいでしょうか。

猿全「しょうがねえや。

定吉「みなさん、こっちへどうぞ。

イエズス聖書研究会の連中が入ってきた。

定吉「紹介いたします。こちらが家主の猿全さん、こちらその奥さん、こちら下宿されて

いる大岡さんに遠山さんにマリアさん、それから新藤さんとその友人の土師沙羅さん、それからこの方は猿全さんの娘さんでデン子さん、もっか妊娠中。

猿全「余計なことは言わんでいい。

猿全「こちら牧師の神谷さん、その奥さん、それから信者の方々です。

牧師「神谷です。

その妻「妻の八栄子です。

信者1「信者1です。

信者2「信者2です。

信者3「信者3です。

切羽つまっているといった表情で、いきなり牧師の神谷が説教を始めた。

牧師「みなさん、本日このような夜半にも関わらず、このような多数のお集まり、皆様の

関心の深さを私、胸に深くしみて感じ入ります。

大岡「別に集まってるわけじゃないんですけど。

遠山「ただのなりゆきですから、これは。

牧師「さて、神のお造りになった世界は、この地球は、現在その終末を迎えんとしており

ます。いったい誰がこのような事態を予見したでしょうか。まっこと神のみぞ知るとい

言葉がびたりつ、当てはまります。この重大事にあつて我々の成すべきは何か。とるべき

道はいづくにありや、同じ時代に生まれあわせた我々子羊はこの試練にどう対処してい

ばよいのでしょうか。

新藤「あの、あんた、そういう話は後にしてもらえるかな。今、ちよつと重要な話で取り

込んでるんだ。

牧師「重要？いま、重要な問題は一つしかありません。

新藤「そういうのより、もつと重要なものがあるんだよ。

牧師「分かります。あなたが分かつてらっしゃらないということとはよく分かります。

新藤「何言つてんだよ。いいから黙れよ。

牧師「私の言葉はもう神の導きの言葉だと思いなさい。

新藤「だから、それはそれで、どっか他でやれつて言つてるんだよ。（猿全に）何なんで

すか、この人は？

デン子「お父ちゃん、誰なのこの人達？

猿全「それがな、それがお前、

定吉「すいません、あの、僕の部屋へ行きましょう。狭いですけど、そこで話し合って、

こっちの話が終わった頃にここで話し合えばどうでしょう。

牧師「分かりました。しかし、私はすぐにもどって来ます。I come quickl

y. みなさん、参りましょう。定吉さんの狭い部屋へ参りましょう。しかし、これだけは
言っておきます。私はここに話し合いにきたのではないのです。最早そんな猶予はないの
であります。私は導きにきたのです。

定吉に引っ張られて聖書研究会の連中は、引っ込んだ。

いつの間にか土師沙羅が台所から清酒の一升瓶を物色してきた。

土師沙羅「いいものがあるじゃないか。シラフじゃ本音も出ないだろうから、これ、いき

ましようよ。ああ、奥さん湯飲みを。それからね、肴は要りませんから、塩でもひとつま
みありやあ、いいですから。

トメ子「(立とうとしたが)

大岡「ああ、僕が行きます。鍋を洗わなくっちゃいけませんから。おい遠山、鍋貸しな。

遠山「ああ、俺も行くよ。

二人、台所に立った。

なんとなく流れるしばしの時間。

と、二階から無遊病者のような感じで六が下りてきた。

六 「何だか、下が騒がしいけど、どうかした？」

みんな、何か驚いたようにハッと六をみる。虚ろな六。

六 「町中の電気がまだついてるんだ。どうしてのかな？」

猿 全 「(腫れ物にでも触るような口調で) 何でもないよ。」

六 「みんな今夜は遅くまで起きてるんだね。やっぱり彗星のことですか？」

トメ子 「いいや、何でもないよ。静かにするから、お前、勉強おし。」

六 「ニュースで彗星がぶつかるって言ってたけど、ほんとかな。」

トメ子 「小さい彗星だよ。ねえ、あんた。」

猿 全 「ああ、そうだ。そんなものぶつかったって、大学はちゃんとあるから、おめえはしつかり勉強するんだ。」

六 「デン子、まだ起きてんのかい。帰りが遅かったけど、どうしたんだい？」

デン子 「お兄ちゃん(と泣く)」

トメ子 「(デン子を抱いて) この子ったらもう。」

六 「どうかしたのかいデン子？」

大岡と遠山が湯飲みを持って戻って来た。

土師沙羅「おっと、ささ、いこうか。おい、君たち、まあいけ。

大岡「はい。

遠山「いただきます。

土師沙羅「ほら、猿全さん、まあ、そんなに気張らずに、ここはゆったり構えて。ほら、

奥さんどうぞ。

トメ子「いえ、私はけっこうです。

土師沙羅「おい、新藤、ほら。

新藤「ああ、すまん。

土師沙羅「(自分の湯飲みに手酌して) うん。美味しい。いい酒だ。辛口だな。舌ざわりが

何ともいいな。

六が台所に行こうとしている。

トメ子「(心配そうに) 何処行くんだい？

六「え？、・・・ちよっとお水。

トメ子「冷蔵庫に牛乳があるよ。温めようか？

六「・・・いらぬよ。(虚ろに応えて台所に消えた)

土師沙羅「ありやあ、あれだな、受験ノイローゼってやつだ。目が死んでたな。

新藤「土師沙羅くん、余計なこと言うんじゃないよ。

土師沙羅「おっと失敬。うん、美味しい。こりゃいける。

またしばし流れる時間。黙ってそれぞれ湯飲みに口をつけている。

六が水の入ったコップを片手に嬉々とした表情で戻って来た。

六 「ねえ、町の人が外に出てるよ。町がねえ、コップを通して見る月の明かりのように白々と明るいんだ。来てごらんよ。お父ちゃん、おっ母さん。デン子も来いよ。

猿全、トメ子お互いに顔を見合わせるが、どちらからともなく立ち上がって、台所へ。デン子もそれにつづき、大岡と遠山にマリアまで台所へ。

残された土師沙羅と新藤、足をくずして。

土師沙羅 「まあ、何だな、墮ろすんだな。あの歳じゃ子供と仕事の両立ってのは無理だと思いがな。

新藤 「そうかい、君もそう思うかい。しかし、あれは生みたがつてるんだ。

土師沙羅 「どうやって食っていくつもりだ。女房と離婚ということになれば慰謝料だって請求されるんじゃないのか？

新藤 「離れの土地、あれを売ればどうかと思うんだが。

土師沙羅 「(新藤の顔をなめるように見て)・・・悪人め。

新藤 「そのための子供さ。そうでなきや、誰がガキなんざ欲しがるものか。

土師沙羅 「あのオボコ娘を料理して、ここの財産を食い潰す気にいるわけか。

新藤「しょうがないさ、金づるに逃げられちまったんだからな。

土師沙羅「その明子さんはどうなんだ、ほんとに別れてくれるのか？」

新藤「あれも気性の激しい女だからな。そう簡単にはいかないと思うが、まさか包丁振り

回すような真似はしないさ。

そのまさかが立っている。新藤の妻明子が包丁片手にいつの間にか、ヌウツと立っているのである。土師沙羅はあんぐり口を開けて湯飲みを落とした。

新藤「どうしたんだ？」

土師沙羅「(指差す)」

新藤「え？」

明子「もどつて来ましたわあなた。さんざん実家で罵られて、私も覚悟を決めて帰ってきました。たんです。

新藤「あ、明子。・・・その手にしている光りものは何だ？ どういう真似だ？」

明子「人にさんざん貢がせておいて、よくも子供のような女に。私、あなたのこと忘れよ

う忘れようと思いましたが、日を追うごとに憎くて憎くて、呪っても呪いきれないくらい憎らしくって。

新藤「そ、それで、どうしようというんだ。」

明子「あなた殺して、私も死ぬわ。」

新藤「馬鹿なことを言うな。お互い未来があるじゃないか。」

明子「もう私に未来なんざありません。

明子、包丁を構えた。と、定吉がひよいと出て。

定吉「おかみさん、お茶があったら、・・・（光景を眼にして）わわっ（尻をつく）

明子「思い知れ！

私「待て、待て明子。話し合おう。いまもこの猿全さんと話し合ってたんだ。

定吉「た、大変だあ。・・・（尻餅をついたまま後ずさる）

土師沙羅「（台所に逃げようとしたが）

その台所から激しく皿や茶碗の割れる音がする。「六、六！」という猿全の声。「六ちゃん、六ちゃん」というトメ子の声。「お兄ちゃん」というのはデン子の声だ。六が何かの発作に見舞われて、暴れているらしい。大岡と遠山がそれを制止せんとしている声も聞こえる。

土師沙羅「前門の虎、後門の狼。家庭内暴力に痴情怨恨の刃傷沙汰か。とんでもねえ。

新藤がジリジリ明子に追い詰められてテレビにぶつかった。スイッチが入ってニュースが聞こえてくる。

テレビ「——お聞きのように事態は暗澹たるものとなって参りました。繰り返して申し

上げますが、『彗星X』はその速度を早めており、急速に地球へ接近しております。太陽の重力のせいであると専門家はみておりますが、地球との衝突、もしくは接触は避けられないという観測であります。すでに夜空が白夜のごとく白ずんでおります。これはまさしく『彗星X』の太陽の光線を反射して輝いているためと思われれます。衝突地点は未だしばれておりませんが、専門家の間では、衝突地点における被害がシミュレートされており、アジアもしくは太平洋に落ちた場合、日本は壊滅的打撃を被ると思われれます。今後も厳重な警戒が必要であります。さて、次は熱田動物園の『ぬらりひょん』のニュースです。

暗転

2 彗星X殺人事件

老人の大袈裟な身振りに焚き火は火の粉を・かな空に吹き上げた。

老人の物語る話はいよいよ佳境だ。聞き入るミネオとキンノスケはぐぐつとその身を乗り出した。

立てば漆黒の闇に上半身を隠されてしまいそうな深い夜である。犇めく星々のあいだにひとときわ明るい彗星が、白い尾を引いて輝いている。

山の谷間の空気は静謐に冷たい。

老人「おお、なんとこれは！・・・探偵法水は驚愕の声をあげた。あのデフォデルム天文台

と、聖アスベスト・サナトリウムは地下道でつながっていたのだ。法水はついにカリノ博士の策謀が何であるかを悟ったのである。超結核ビールス、レッド・ラフ・マニアと彗星Xのガスによって、彼は世界の死者を蘇生させるつもりだったのだ。何という悪魔の陰謀であろうか。その頃、デフォデルム天文台では、我等が主人公、少年ミネオとドクター・カリノが睨み合って立っていた。そして、ついに・・・ついに、悪魔の科学者カリノ博士に最後の戦いを挑まんとして、少年ミネオは万能ナイフを構えた。カリノ博士はそれを見ると薄ら笑いを浮かべてサーベルを抜き放つ。悪が勝つか正義が勝つか。世界中にレッド・ラフ・マニアの細菌を撒き散らすビールスミサイルの発射スイッチはカリノ博士の手元にある。それを押されたら世界の破滅だ。彗星の近日点通過の時刻は刻一刻とせまってくる。

「までカリノ、そうはさせないぞ！——ミネオはナイフで斬りかかった。それをサーベルで受け止めてカリノが笑う。

「ガッハハハハ・・・もう遅いぞ小僧。——カリノの指がスイッチに伸びた。

ああ、地球の運命や如何に。果たして少年ミネオはドクター・カリノの野望を打ち砕くことが出来るのであろうか。そして探偵法水はこの危機にどう対処するのであろうか。デフォデルム天文台に風雲の嵐が巻き起こる。・・・はい、今夜はここまで、後はまた明日のお楽しみ。

ミネオ・キンノスケ「ええ！、もうお終い？

ミネオ「それでつづきなの？

老人「そう。明日はいよいよ最終回じゃ。

キンノスケ「早く聞きたいなあ。

老人「ほれ、もう電気を点けなさい。

ミネオが電灯を点ける。と、何くんだ、そこはミネオの部屋であることが分かる。空の星も彗星も焚き火すら作り物である。

老人「(手帳を広げて) さあて、この次は三丁目のケン坊の家だな。(焚き火の模型を鞆に仕舞いこんだ) それじゃあ、また明日の晩。ああ、ミネオくん、お母さんに今月のお話の代金を口座の方に振り込むように、ちゃんと言っておいてね。

老人は去っていった。

ミネオ「あーあ、あれでケン坊の家で話す時はさ、・・・正義の少年ケン坊は万能ナイフを構えた。なんて言ってるんだろうな。

キンノスケ「うん、きつとそうだよ。

ミネオ「トシオくんとおじや、正義の少年はトシオっていうんだぜ、きつと。もう話が終わっている家だってあるんだろうな。

キンノスケ「うん、あるよきつと。でもトシオ君のところなんか、ドクター・カリノはまだ出てきてないんだって、僕、つづきをもらしたらトシオくんに叱られちゃったよ。

ミネオ「ねえ、キンノスケ、ああいう老人語りべの会の人と話してくれるお話じゃなくつ

てき、ほんとうの冒険というやつがしてみたいね。

キンノスケ「うん、やってみよう。

ミネオ「ホントウに彗星が飛んできてさ、そいつが地球にぶつかるとも知んなくって、そ

いで悪魔の科学者が世界征服を企んでいて、死者を蘇生させてさ、そういうヤツと僕たちが戦うんだ。

キンノスケ「うんうん。

ミネオ「夜は紫の影絵、宇宙は漆黒の闇、輝ける雪の彗星、空を銀のメスで裂く！

キンノスケ「うんうん。

ミネオ「来れ聖アスベスト・サナトリウムの屋上へ。地球最後の夜をともに！

キンノスケ「いざ集わんかな地球最後の夜を！

ミネオ「彗星飛んで来ないかな。彗星さえ飛んでくれば、世界は冒険小説になるのになあ

。そしたら、僕たちはその小説の主人公みたいになれるのに。

キンノスケ「うん。きつとなれるよ。誰だつてなれるよ。

ミネオ「誰だつて？誰だつてなれるわけないじゃないか。

キンノスケ「ああ、そうだ。そうだ。

ミネオ「僕たちのようでない駄目さ。

キンノスケ「うんうん。

ミネオ「特に僕みたいでなくっちゃ駄目さ。

キンノスケ「そう、ミネオでないといけないよ。

ミネオ「ケン坊とかトシオなんて駄目だよ。

キンノスケ「うん、だめ駄目。

ミネオ「正義の少年は僕だ！

キンノスケ「うん。僕も子分にしてね。

ミネオ「してやるよ。僕の言うことさえ聞けばね。

キンノスケ「うん、聞く聞く。

ミネオ「ねえ、ケン坊、いいもん見せてあげようか。

キンノスケ「うん。見せて、見せて。

ミネオ「(ポケットから何やら出した) ほら。

キンノスケ「あつ、万能ナイフだ。どうしたの？

ミネオ「夜店でね、買ったのさ。千円もしたんだぜ。(かざして見せる) これが正義の少

年のシルシだ。

キンノスケ「よく切れそうだね。

ミネオ「どんな怪物でもこれでイチコロさ。えい、えい。(振り回す)

キンノスケ「危ないよ。ミネオ、危ないってば。

ミネオ「万能ナイフを怖がってちやいけないうよ。

キンノスケ「それでドクター・カリノと戦うんだね。

ミネオ「その前に多くの怪物や化け物や妖怪とも戦うんだ。(ベッドに飛び乗る) ああ、

後ろは崖だ。千尋の谷底だ。追い詰められたか、危うし少年ミネオ。立ち塞がるのは怪物

、えーと、怪物、ほらケン坊、怪物だよ。

キンノスケ「(ふざけて怪物のふりをする) ウオーツ怪物グラツタンだぞお。ウオー

ツ。怪物グラツタンはね、怪物の王様なんだぞ。ウオーツ。

ミネオ「おのれ怪物、万能ナイフをくらえ!

キンノスケ「怪物グラツタンは不死身だぞお。ワオーツ!

ミネオ「万能ナイフはどんな怪物でもやっつけるんだぞ。死ね、グラツタン!!!

ミネオはキンノスケに万能ナイフを突き立てた。

キンノスケ「ウワツ!痛いよ。ほんとに刺したら駄目だよ。

ミネオ「怪物め、キンノスケに化けたな。騙されないぞ。(なおも突く)

キンノスケ「ウエツ。。。 (倒れる)

ミネオ「死んだふりなんかは誤魔化されないぞ。(なおも刺す)

キンノスケ「ギャツ、やめて、やめて、死んじゃう、痛いよー。助けてミネオっ。

ミネオ「不死身の怪物が何を言う。

ミネオ、めった刺しだ。当然キンノスケは絶命する。

ミネオ「ついに怪物グラツタンを倒した。(やっとなおにかえって)。。。よし、もう

いいよキン坊。キン坊、キンノスケ?どうしたの?(ゆり動かすが)もう終わったんだっ

てば。(と、手を見ると血がついている)あれ?何だこれ、血がついてる。。。ねえ、

キン坊・嘘だろ。今のうそんこだよ。だって、冒険小説の主人公は死なないんだよ。ねえ、起きろよ。（万能ナイフを見て、それに血がついているので、慌てて床に捨てた）どうしよう。・殺しちゃったみたいだ。で、でも、これは怪物グラタンタンだから、いいんだ。いいんだよな。・・・キンノスケじゃないんだもの。（じつとキンノスケの死体を見ている）やっぱり、キンノスケだ。キンノスケだ。（ゆり動かす）おい、死んだぶりなんかしたって駄目だぞ。ねえ、キンノスケ、キン坊、ほんとに死んじゃったの？・・・ほんとに死んでら。（しばらく呆然としているが、急に陽気にカラオケボックスにいらみたいに歌い出す）

ηだめダメ駄目よ 死んじや駄目

もしもし亀よ 毛が生えた

ひよっこり熊さんやってきて

東京タワーに花が咲く

（突然歌い終わると、また戦慄し）あーん駄目だあ、出鱈目の歌なんか歌っても状況は変わらないよう。どうしよう。殺人犯になっちゃった。（おろおろし始めた）どうしよう。どうしようかな。

母親らしい声がする。

「ミネオ、ミネオ。いるの？ミネオ。」

ミネオ「は、はい。」

――「老人語りべの会のお爺さんはもう帰ったの？」

ミネオ「はい。」

――「ミネオ、ちよつといい？すごいニュースがあるのよ。」

ミネオ「え？・・・（キンノスケの死体を見て）ちよつと待って。散らかってるから。（キ

ンノスケの死体を抱え起こして、毛布でくるむと、ベッドにもたせかけた）いいよ、どうぞ。

ミネオの母が入って来た。

ミネオの母「ねえ、ミネオ。ミネオの喜びそうなニュースよ。今ね、テレビでやってたの

。あのね、彗星が飛んでくるんだって。今度はハレー彗星よりもよく見えるだろうって。

ひよつとすると危険なくらい地球に近づくんだったって。

ミネオ「ええ！すごいなあ。・・・」

ミネオの母「（キンノスケの変なのに気付いて）あれ？どうしたの？キンノスケちゃん、

寝てるの？

ミネオ「え、ああ、うん。こいつ寝てるんだ。」

ゆっくり、キンノスケがベッドのへりを滑って横に倒れた。

ミネオの母「まあ、よく眠ってること。まるで死体みたい。」

ミネオ「そ、そうなんだ。死体ごっこしてたら、ほんとに眠ってしまったんだ。

ミネオの母「変な遊びするんじゃないよ。この間も近所のマサルくんところで、首吊りごっこしていてタケオくんって子が死んだばかりなんだから。

ミネオ「うん。大丈夫だよ。ねえねえ、彗星が飛んでくるってほんとにほんと？

ミネオの母「ほんとよ。来月には肉眼で観測できるようになるって。

ミネオ「そいつはすごいな。ねえ、キンノスケ、彗星が飛んでくるってさ。起きろよ、キンノスケ。・・駄目だよ、よく寝てるよ。へへへ・・

ミネオの母「ちゃんと息してる？

ミネオ「あたりまえだよ。僕殺してないもん。

ミネオの母「え？

ミネオ「ううん、何でもない。そうか、彗星が飛んでくるのか。

ミネオの母「キンノスケくんは今夜泊まるの？

ミネオ「え、ああ、うん。

ミネオの母「じゃあ、お家の方に電話しておかなくっちゃね。

ミネオ「うん、頼むよ。

ミネオの母去る。

ミネオ「さて、どうしよう。この死体をどうしよう。困ったぞ。捨てるわけにもいかない

し、何かいい方法はないかな。帰ったってことにしておこうかな。駄目だ、ママに見られ

たもんな。どうしようかな。仕方がない、ママも殺そう。電話するっていったな。その前に殺さなくっちゃ。いいんだ、彗星が飛んでくるんだから、きつと彗星のガスとレッド・ラフ・マニアの細菌で生き返るんだから。そうだ、いい考えがある。語りべのお爺さんにあのドクター・カリノのカバラの呪文を教えてもらおう。それを唱えたら、きつと死者が蘇るってやつだ。きつとキンノスケだつて生き返るさ。な、なんだか、冒険小説みたいになってきたな。ははは。ひひひ。か、身体が震えてきたぞ。そうだ、早いとこママを殺さなくっちゃ。いや、あれはママじゃないんだ。妖怪マンマなんだ。そういうふうにしておこう。これだつてキンノスケじゃないんだ。これは怪物グラツタンなんだ。(万能ナイフを拾う) 僕は主人公なんだから、何だつて出来るんだ。・・・よしつ。

部屋を出る。

—— ママ、ママというミネオの声が階下で聞こえる。

溶暗

して、明るくなるとミネオの部屋であるが、毛布でくるんだ死体が一つ増えている。ミネオが語りべの老人を引つ張ってくる。

老人「駄目じゃよ、話は一晚に一回と決まってるんじゃないからな。

ミネオ「そんなんじゃないって言ってるだろ、早く来てよ。

老人「おいおいそう引つ張りなさんな。

ミネオ「ねえねえ、ほんとうにホンモノの彗星が飛んでくるって知ってる？

老人「ああ、そういうばそんなことをテレビが言っておったな。

ミネオ「僕ね、もうほんとうの冒険をすることに決めたんだ。

老人「へーえ。（と怪訝な顔だ）ほんとうの冒険ねえ。

ミネオ「ねえ、彗星のガスでさ、死者が蘇るでしょ。

老人「ああ。

ミネオ「でもカバラの呪文でも蘇るんだったよね。

老人「そうだよ。

ミネオ「あのカバラの呪文教えてよ。

老人「教えてもよいが、どうするの？

ミネオ「あのね、妖怪マンマアと怪物グラツタンを万能ナイフでやっつけたんだけど

さ、それがどうもママとキンノスケみたいなんだ。でも、妖怪マンマアと怪物グラツタン

タンなんだけどね、あのね、どっちか分からないけどさ、カバラの呪文で蘇らせればい

んだよね。僕、殺してしまっただけどさ、でも、それは妖怪マンマアと怪物グラツタン

タンなんだけど、でも、ママとキンノスケでも蘇るよね。

老人「おいおい坊や、君はいったい何を言ってるのかね。わしのような老人には、君のそ

の言語はさっぱり分からないよ。

ミネオ「僕もよく分からないけどさ、カバラの呪文で蘇らせてよ。

老人「何を蘇らせるんじやと？

ミネオ「だからこれ。（と毛布にくるんだ二つの塊を指差す）

老人「何だねこれは？

ミネオ「妖怪マンマアと怪物グラッタンタンだって言ってるだろ。ママとキンノスケなん

だよ。(毛布をめくるとミネオの母とキンノスケの死に顔が見えた。ああ恐

老人「ど!!!..どうしたんじやこれは?

ミネオ「(老人の言葉など聞こえてない) 彗星、飛んでくるんだって。世界は冒険小説に

なっちゃうよ。行かなくっちゃ、僕は主人公だろ?

老人「君、これは、これは君がやったのかね。

ミネオ「早くカバラを唱えるんだ。ドクター・カリノはもうすぐそこまで来ている。

老人「君、君はいつたいぜんたい、自分が何をしたのか分かってるのかね。

ミネオ「え?何?

老人「これは君のお母さんと友達のキンノスケくんじやないか。

ミネオ「そうだよ。そんなこと言われなくなっただって分かっているよ。だから、カバラの呪文

だって言ってるじやない。

老人「(慌てて出て行こうとする)

ミネオ「何処行くの?

老人「警察じや。

ミネオ「駄目だよそんなもの呼んじや。警察は最後の最後に出てくるんだよ。事件はあく

まで僕のような少年が解決しなくっちゃ。

老人「おい、君、眼を覚ませ。しっかりしろ。

ミネオ「変だな、何を言ってるの?待てよ、そうか、お前ひよつとしてカリノ博士の仲間

だな。

老人「馬鹿なことを言ってるんじゃない。

ミネオ「(また万能ナイフを構える) 正体を現せ!

老人「そのナイフでやったのか。何ということを。

ミネオ「ママとキンノスケの仇をうってやるぞ。

老人「ママとキンノスケくんをあんふうにしたのは君じゃないか。

ミネオ「違う。これは畏だったんだ。カリノ博士の畏だったんだ。君は手下の魔術使いロ

ーゼン・ダインだな。よくも僕を畏にはめたな。

老人「駄目だ。尋常でなくなっておる。

ミネオ「行く手を阻まんとする者は、倒して通るぞ。

老人「やめなさい。

ミネオ「えい!(切りかかった)

老人「よしなさい。

逃げる老人の背に万能ナイフが突き刺さる。

老人「うう。……(倒れた)

ミネオ「来い化け物ども、世界を救うのはこの僕だ。少年ミネオだ!

ベッドにかけあがって、それらしくポーズなんかとっている。

ミネオ「テレーズ、テレーズ。」

ミネオが呼ぶと、『碧い彗星の一夜』をご覧の方々なら御存知、蘇生人間テレーズが現れる。その肩にひよいとミネオは飛び乗った。

ミネオ「行くぞテレーズ。夜は紫の影絵、宇宙は漆黒の闇、輝ける雪の彗星、空を銀のメ

スで裂く。前方にははるかデIFOデイルム天文台、後方には遠く聖アスベスト・サナトリウム。天空には妖しく輝く彗星X。僕は今これから始まる冒険探偵活劇の中心に立っているんだ。行くよ、待ってなんかいられない。いぎ、狂える嵐の中へ。……

狂える嵐は自分だというのにまあ、この子ったら。しょうがねえな。

ミネオゆつくりと前進。

暗転。

3 猿全家の家庭の事情と狂える嵐の邂逅、そして彗星X

猿全家の茶の間。土師沙羅がひとりで飲んでいる。どうやら台所のドタバタは収まったらしく、マリアが大きく息をついて戻ってくる。

土師沙羅「どうしたい？受験ノイローゼの少年は。」

マリア「彗星を見るんだって、外に飛び出して行ったわ。

土師沙羅「大丈夫かね。

マリア「大岡さんと遠山さんが後を追ってるから大丈夫よ。

土師沙羅「こっちも大変だったんだぜ。

猿全とトメ子、それにデン子が戻ってきた。

土師沙羅「おや、御主人、大変だったですね。まあ、一杯いきなさいよ。こういう時には

酒は薬だ。(湯飲みを猿全にもたせて注ぐ)

デン子「お兄ちゃん大丈夫かしら。

猿全「いいんだ。暴れるだけ暴れたら、それでケロッとするもんなんだ。

デン子「・・・？新藤さんは？

土師沙羅「へっへっへ、お嬢さん、それがね、お宅たちが大騒ぎしてらっしゃる間に、こ

っちでも小競り合いがありましたね。

デン子「こぜりあい？

土師沙羅「いやあ、何というか、クライマックスですよ。新藤くんの女房の明子さんが現れたんですよ。

猿全・デン子・マリア・トメ子「ええ！

デン子「それで新藤さん、何処へ？

土師沙羅「何処もくそも分かりませんよ。何しろ明子さん思いつめたらしくって、包丁な

んて振り回すんだから。

デン子「ええっ。

猿全「な、な、何だって！

トメ子「お前さん。

マリア「ほんと？それ。

土師沙羅「ええ、ですから仲良くここをおん出になったわけじゃないんです。まあ、何と

いうか、新藤くんが逃げて、明子さんがそれを追っ掛けたわけですな。

デン子「いやーん。

土師沙羅「こういうのもあれですかね、暴れるだけ暴れさせれば、ケロですかね？

マリア「冗談言ってる場合じゃないわよ。どうしよう、警察？

猿全「いや、それはなんねえ。

トメ子「そ、そうだよ、家庭のことに警察なんて。

と今度は定吉の部屋の方が騒がしくなって、あの牧師が頬を押さえて転がり出てくる。その後に憤った表情の妻、八栄子。

牧師「お、落ち着きなさい。

八栄子「人非人！神の仮面をつけた悪魔！（手を振り上げる）

定吉「（中に割って入って）奥さん、落ち着きましょう。暴力はいけませんよ。

牧師「そうだ。牧師の妻ともあろうものが、牧師を平手うちするとは何事だ。

土師沙羅「何事か知りたいのはこっちだね。どうしたんです？」

牧師「よくぞ聞いてくださいました。私は、この世界の終末に際して、みな悔い改めねば

ならないとそう申し述べたのであります。そこで各々の罪を告悔せねばならんと、その先陣をきってまず私の罪を懺悔したのであります。

信者1が走り出てきて八栄子に土下座する。

信者1「すいません奥様。

牧師「聖職にあるとはいえ、私もまた人の子であります。

土師沙羅「はーん、なるほど、信者と出来てたのか。

マリア「聖職でなく生殖のセイシヨクか。

八栄子「(顔を覆って泣きくずれる)

定吉「奥さん、もうすんだことなんですから。

八栄子「すんでなんかないわ。わーん。

定吉「人は罪を犯します。それは仕方のないことです。その度に神のゆるしを請えばいいのじゃありませんか。

信者1「私、懺悔します。告悔します。アーメン。私が悪うございました。彗星が地球に

ぶつかるというので、どうせ死んでしまう身ならば、好きな方に私の純潔を差し上げよう、そう思ったのでございます。私は神谷さんを密かにお慕いしておりました。

信者2と3も同じように八栄子の前に土下座する。

信者2 「すいません、奥様。

信者3 「すいません、奥様。

マリア 「あれま。

土師沙羅 「こりゃあ、とんだ役得だ。

信者2 「私も牧師様をお慕いするあまり。

信者3 「私は、私は、その、男女のあのことが好きで、別に牧師さまをお慕いしていたわ

けではありませんが、もう、あの男女のあのことがしたくて、したくて、

八栄子 「汚らしい、聞きたくないわ。

土師沙羅 「いいや、汚らわしくなんかない。諸君、それこそ人間というやつだよ。アーメ

ンだのソーメンだの言っている、人間なんて所詮はそんなもんさ。まあ、いいじゃない

ですか奥さん、ひよつとして、彗星Xというやつが、頭の上に落ちてきたら、もうそれで

全てパーなんですから。この牧師さんがやったことだって、人助けですよ。

牧師 「その通りです。この、世の終末に臨んで、みな悔い改めなくてはなりません。私は

確かに肉欲の罪を犯しました。しかし、私は悔い改めた。彼女たちもそうです。さあ、み

なさん、みなさんも悔い改めて下さい。悔い改めた者たちに天国の門は開かれます。

マリア 「問題のすりかえじゃない？

八栄子 「私、里に帰ります。

牧師 「八栄子、この期に臨んで何を言う。お前も悔い改めなさい。

八栄子「私、そのような罪深き人種ではございません。

牧師「八栄子！」

八栄子「この方の申すように、問題のすりかえですわ。

牧師「お前は牧師の妻として恥ずかしくないのか。

八栄子「恥ずかしいですわ。私のことじゃなくて、あなたのことがですよ。

定吉「奥さん、罪のない人間なんていません。我々が罪深いからこそ、主イエス・キリス

トは十字架を背負いになったのではありませんか。神谷さんも、主と同じ十字架を背負わ
れたんですよ。

八栄子「そんなにいいものかしら。

定吉「聖書は教えます。その者を見る眼に肉欲があれば、すなわちそれは姦淫を犯したの

である。我々はみな同じです。誰一人として罪のない者はいない。しかし、全ての罪は
、主イエスの愛によってゆるさされているのです。

土師沙羅「駄目だよあんた。こういう下世話な問題に観念論なんか持ち出したって、所詮
は暖簾につっかい棒しているようなもんさ。

と、この時デン子がおっと出て行こうとする。

トメ子「デン子、何処へ行くんだい。

デン子「だって、

猿全「お前、新藤さんを捜しに行く気なんだろ。よせ、そんなことはお父っちゃんがゆる

さねえぞ。

デン子「だって、

土師沙羅「お嬢さん、心配しなくたって戻って来ますよ。あいつに逃げるところなんて

ありやしないんだから。

デン子「・・・

猿全「お前はここに座ってろ。

デン子「(仕方無く座る)

猿全「(信者たちに) あんたたち、今夜は帰ってくれませんか。痴話喧嘩は一つでたくさ

んだ。

八栄子「ふん！(去った)

牧師「八栄子っ。(追った)

信者たち「奥様、牧師様、(追った)

茶の間はしばし静けさを取り戻した。土師沙羅は酒に身体をあずけるように飲み、猿全も苦りきって湯飲みを口に運ぶ。

定吉「(玄関で見送っていたが、戻ってきて) 申し訳ありませんでした。

猿全「・・・。

定吉「神谷さんもほんとうはいい方なんです。信者の方たちも大人しい人ばかりなんです

。奥さんだって普段はそりやもう賢夫人で、・・・なにぶん、こんなあんばいなんです

から、みんな少し変になっているに違いありません。

猿全「（その件については関心がないらしく）デン子、新藤さんのことは諦めるんだ。

デン子「いや！

猿全「諦めるんだ。

デン子「いやよ、だって私のおなかには新藤さんの子供がいるのよ。

猿全「子供は始末しちまえ。

トメ子「あんた。

猿全「いや、それが一番いい。それで新藤さんにはここから出てってもらおう。

デン子「いやよ。私は絶対に嫌！

マリア「デン子ちゃん、私もそれがいいと思うよ。あんな甲斐性のない男と一緒になんて

ごらん、あんたの人生お終いだよ、きつと。

デン子「だって、私、好きになったんだもん。（泣く）

マリア「若いねえ。・・・

玄関の戸が開いた。転がり込むようにして新藤が入って来る。

土師沙羅「ほうら、御帰還だ。

新藤「（土師沙羅の湯飲みをひったくって、グイッと飲む）ちくしょう、とんでもないヤ

ツだ。

デン子「新藤さんっ。（抱きつく）

新藤「心配かけたね。愛してるよ。

猿全「ああー。(頭を抱える)

トメ子「あんた。

猿全「(もう半泣きだ)うるせえ。

土師沙羅「明子さんは？」

新藤「向こうの町まで行って、撒いたけれど、おっつけまた来るに違いないよ。

もう来ている。

明子「もう来てるわ。

新藤「わわっ(デン子を突き放す)

明子「あなたも男なら、潔くなさいよ。

新藤「しつこいやつだな。俺は死にたくなかない。

明子「私も一緒に死んであげるって言ってるのよ。せめてもの情けだと思いなさい。

新藤「そんな情けなんか要らん。

明子「(包丁を振りかざす)

新藤「おい、土師沙羅、助ける。何とかしてくれ。

土師沙羅「ペンは剣よりも強しなんて、誰が言ったんだか。ペンなんて何の役にもたちや

しねえか。・・・俺は知らんぜ。

新藤「おい、おい、

デン子「奥さん、新藤さんを殺すなら、私も殺して。

猿全「おい、デン子。

トメ子「デン子、何を言うんだい。

土師沙羅「殊勝な心掛けだな、ほんとに惚れてるぜ。

明子「ええ、そうしてあげるわ。後からゆっくり切りきざんであげるわ。

土師沙羅「あな恐ろしや。

猿全「待つてください、奥さん、早まっちゃいけねえ。今もこいつに言い聞かせていたと

こなんです。きつちりときれいさっぱりさせますから、どうか、その刃物はしまってくださいなさい。

明子「猿全さん、私、もう覚悟は出来ているんです。

猿全「どうか、そんな覚悟は捨てておくんなさい。

マリア「明子さん、話し合いましょ。きつといい方法が見つかるわ。

明子「だまれ、新藤があんたと寝てることも知ってるのよ。

マリア「お尻触っただけだって。

明子「嘘よ。

マリア「作家の先生、駄目よ、ばれてるわ。

新藤「おい、何も今そんなことを言わなくなっちゃったって。

明子「やっぱいい！（逆上する）

デン子「ええ？ほんとなの？

マリア「冗談よ、冗談だってば。と、いまさら言っても信じてもらえっこないか。

明子「もうみんな殺してやるう！」

と、その時である。

――「待て！」

という声があったのである。

一同がその声があった方を見ると、風呂敷のマントに風呂敷の覆面をした者が立っている。どうも、声からしてミネオらしいのだが。

――「手にした包丁は魔女のシルシ。お前はドクター・カリノの手下、魔女ホーチョンと見た。

何が何やら分からないといった表情の御一同。

――「誰だと問われるならば、名乗ってやろう、我こそは正義の使者、フロシキ仮面。し

かしてその正体は、正義の少年、ミネオだ！（とフロシキの覆面をとる）

猿全「ああ、また変なのが現れた。俺はもう知らん、知らん、知らん。

ミネオ「しかし、僕が来たからにはもう大丈夫です。いざ魔女ホーチョン、正義の少年と

尋常に勝負だ。（と、万能ナイフを構えた）

明子「誰なのあなた？」

マリア「何なの？この子。

ミネオ「いくぞ！（万能ナイフを振り回して、明子に突進する）

蜂の巣をつついたような御一同。それでも万能ナイフを必死で受け止める明子。

ミネオ「なかなかやるな。さすが魔女のホーチョン、手強いヤツだ。戦闘能力数値120

0とみた。すばやさがレベル20、攻撃レベル18、防御7、防御が甘いぞ。

マリア「定吉さん、この子何なの？

定吉「何かのマニアのようですね。差別用語で言うときのつく人かな。

ミネオ「（離れると）勝負は次の一撃で決まる。いくぞ（切りかかった）

今度は明子、包丁を弾き飛ばされた。

明子「きやつ。

ミネオ「死ね！（明子に斬りかかる）

と、衝動的に新藤がその間に割って入った。

新藤「危ない！

その新藤の腕をナイフは切った。

新藤「ウワッ。

明子「あ、あなた、あなた。（抱きかかえる）

ミネオ「ほーう、新手的敵が現れたか。よし、両方とも倒してやる。

ミネオがまたも万能ナイフを構えた時、

「待ちたまえ。」

見ると、刑事らしい男と、あの語りべの老人が立っている。

刑事「酒井さん、この少年ですね。

老人「はい、この子です。間違いありません。

刑事「君、ナイフを離しなさい。

ミネオ「カリノのやつめ、次々と配下の魔物を送り込んでくるな。

刑事「（警察手帳を見せて）管轄の小池と申します。この少年は自分の母親と友人を殺害して逃走中の子供です。

驚く御一同。

刑事「ミネオ君、さあ、ナイフをこっちに渡しなさい。

ミネオ「（老人を見て）そっちのお前は見覚えがある。魔術使いのローゼン・ダイナだな

。そうか、カバラを使って生き返ったのか。

老人「ミネオ君、私だ。覚えてないのか？

ミネオ「ローゼン・ダインめ。

刑事「しょうがない。皆さん、下がっててください。（コートを脱いで腕に巻いた。ミ

ネオのナイフと格闘する気であるのだ）

と、ミネオ、おのれが不利と見るや、やにわにデン子の腕を掴むと引き寄せて、その喉もとにナイフを突きつけた。人質にとったのである。

デン子「きやつ、やめて。

ミネオ「卑怯だぞ。人質をとるとは。

刑事「それはこっちの言うセリフだ。

ミネオ「近寄るな。近寄るとこの少女妖怪の命はないぞ。

刑事「君、馬鹿な真似はよせ。

老人「ミネオ君、君は悪い夢を見ているんじゃない。眼を覚ますんじゃない。

ミネオ「分かっているさ。みんな、ドクター・カリノの催眠音波で操られているだけなん

だ。僕は闘うぞ。最後の一人になっても闘うぞ。きつと母さんとキンノスケの仇をうってやるんだ。まず、こいつから血祭りだ。

デン子「いや、助けて。新藤さん、新藤さん。

ミネオ「来い。来るんだ。（二階に上がって行く）

刑事、追おうとしたが。

ミネオ「動くな。動くところのナイフが首をちよんぎるぞ。

デン子「新藤さん！

狂える嵐はデン子を連れて二階に消えた。

「きゃーっ、新藤さんく。

というデン子の叫びが聞こえる。

猿 全「デン子っ。

トメ子「デン子。

と、それぞれデン子の身を心配して二階を見る。

さて新藤は明子の腕の中で気絶していたが、眼を覚まして。

新藤「誰か俺を呼んだかい？

明子「あなた、大丈夫。しっかりして。

新藤「明子か、ここは何処だ天国か？（なんて芝居をしている）

明子「あなた、私を助けてくれたのね。私の身代わりになってこんなことに。ああ、あな

た、ごめんなさい、私が悪かったわ。私、あなたを愛しているのよ。愛ゆえに包丁振り回したのよ。ごめんなさい。

新藤「愛が包丁振り回すのなら、巷のアベックは血まみれだよ。いや、待てよ、そうか、愛に傷つくとはそのことか。ああ、文学だな。

明子「ええ、文学よあなた。

新藤「明子、僕はやっぱり文学に生きるよ。

明子「そうして頂戴。あんな小娘のことなんか忘れるのよ。もう一度私たちやりなおしましょう。

新藤「食わせてくれるか？

明子「あなたの一人くらい養ってあげるわよ。

新藤「たまには浮気してもいい？

明子「いいわ。私のところに戻ってきてくれるなら、女なんていくらでも作りなさい。あなた作家なんだから、当然よ。

新藤「よし、決めた。デン子ちゃん、あれ？いないの？まあ、いいや。とにかくそういうことにするわ。

明子「ともかく、医者に行きましょう。病院行って手当てしましょう。

新藤「そうだな。そうしないと死ぬかも知れないしな。

明子「そいじゃあ、みなさん、私たちはこれで失礼します。大屋さん、部屋の荷物は後で取りに来ますから。一応今月いっぱい部屋出ます。よろしく。

新藤と明子、行ってしまった。

呆気にとられている猿全たち。

マリア「・・・なんだかデン子ちゃん、あつというまに捨てられたみたいね。

土師沙羅「主食とつまみ食いじゃ、主食が勝つさ。

と、新藤、戻ってきて、

新藤「猿全さん、今のは方便ですからね。明子を大人しくさせるための嘘ですから、デン

子さんのことは何れゆっくり、へへへへ。

明子の新藤を呼ぶ声がする。

新藤「そいじゃあ、こんな場合ですけど、後はよろしく。あの、くれぐれもデン子さんに

は死なないように言っておいて下さい。私の傷ならご心配なく、こんなものあなた、かす

り傷ですよ。ふふふ。じゃあ。(去った)

猿全「な、何がかすり傷だ。誰が心配なんかするもんか。

マリア「そうよこんな時に。きつとあいつは怖じ気づいて逃げたのよ。

猿全「おい、塩でもまけ。

またデン子の悲鳴が聞こえる。

トメ子「お前さん、デン子が、デン子が。」

猿全「わ、分かってら。分かってるけど相手は刃物持ってたんだ。新藤のやつも、あの子どもデン子を捨ててくれりゃあ、言うことねえんだが。」

トメ子「何、言ってたよ。」

猿全「分かってるよ。刑事さん、何とかして下さいよ。」

刑事「何とかしたいが、何しろ、鬼に鉄棒、キチガイに刃物というくらいですから。電話拝借できますか。応援をよこしてもらいます。」

トメ子「こっちはです。」

電話する刑事。

大岡と遠山が六を連れて戻って来た。

歌なんか歌って、ちよいと踊っている。

リコメットさん コメットさん

スカートが短いよ コリヤコリヤ

その太股に お父さんはクーラクラ

お母さんは カツカツカと

子供心に僕たちもズボンの前がふくらんだ ああふくらんだと

(注) この歌は何番まであってもいいが、作者はズボラなのでここまでしか作らない。

大岡「ただいま戻りました。

六「ただいま。

マリア「(大岡と遠山に) 何を呑気に歌なんか歌ってんのよ。

大岡「そんなこと言ったって、これでも六ちゃんを誤魔化して、ここまで連れてくるの大

変だったんですよ。

六「(二階に行こうとする)

猿全「ああ、駄目だ六。今、二階はいけねえ。

六「え? どうして?

遠山「(マリアに) みなさん、どうしたんですか? 何かあったんですか?

マリア「これこれしかじかよ。あんたたちが外行ってる間に、こうなっちゃったの。

遠山「そりゃ、大変だ。

大岡「えらい騒ぎだったんですね。

六「(二階を見て) デン子、・・・よし、僕が助けてやる。

六、チンドン屋の小道具箱から日本刀を持ち出した。

猿全「おいおい、そいつはいけねえ。

大岡「駄目だよ六ちゃん。

六 「いや、まかせといてよ。僕には作戦があるんだ。

猿全・大岡・遠山・マリア「作戦って？

六 「（大岡に小刀を持たせて）いいかい、相手がこう突いてきたら、こう避けて、こう斬る。こうきたら、こう突くん。そいでもし、こうきたら・・・えーと、

大岡「あのね六ちゃん、そういうのは作戦じゃないんだよ。

六 「大丈夫だよ。

土師沙羅「大丈夫じゃないのかな。

マリア「まあ、どうして？

土師沙羅「昔つからゴジラにやモスラ、核には核と相場が決まってるのさ。妄想狂の少年

には受験ノイローゼの少年が均衡のとれた対決で、ちようどいいんじゃないかね。

マリア「そんな、無責任な。

猿全「いけねえ、六、早まっちゃいけねえよ。

六 「我に勝算あり。（言うが早い、二階に駆け上がった）

刑事「（電話をかけ終わって）いやあ、駄目だなあ、なにぶんにも彗星騒ぎであちこちで

不穏な輩が動いているらしくって、応援が期待出来ないんです。ここは皆さんの御協力の
下に、何とかしないと。

老人「私は帰ってよろしいでしょうか。

刑事「はい、結構です。いやあもう登場人物を減らさないことには、作者の頭の中はコン

ガラガッテしようがないところですからな。

老人「しかし、作者のほうも気が使ってますよ。なんしろうちの劇団は人数が多いし、

やっぱり少しでも多く出演させようと思って、こりやもう涙ぐましい努力ですよ。（と言いつつ老人は姿を消した）

定吉「あの、私は定吉です。

マリア「それがどうしたの？

定吉「何か言っておかないと、作者が私のことを忘れそうぞ。

マリア「そうよね。これだけいっぺんに人が出てるとねえ。忘れるわよねえ。チェーホフ

の『三人姉妹』のほうがまだ分かり易いわ。

トメ子「私なんか出てるわりには、ろくな台詞がないんだよ。

猿全「おい、いい加減にしねえか。そんなことより、刑事さん、あつしたちはどうすりや

いいんですか。

刑事「そうですね、やっぱりこういう場合は地道に説得するしか。・・・

大岡「それが刑事さん、地道にやってる場合じゃないんです。

刑事「と、言いますと？

遠山「日本刀もったノイローゼが突っ込んで行っただけです。

刑事「ええ？

そのノイローゼがミネオと肩を組んで下りて来た。

猿全「六つ。

六「心配するなよ、みんな。僕たち、意気投合したんだ。（ミネオに）なつ、

ミネオ「ああ、彼はこの連中の中でただ一人、正気だよ。

大岡「何だか最悪の事態になったんじゃないでしょうね。

六「僕たちはこれからドクター・カリノの天文台へ行くよ。

ミネオ「心強い味方が出来てうれしいよ。

猿全「デン子はどうしたんだ？

六「上で泣いてる。

猿全「(トメ子に) おい。

トメ子「はい。(二階へ上がる)

刑事「ともかく、君を連行するからね。(ミネオの腕をとった)

ミネオ「何をするんだ！(ナイフを振り回す)

刑事「(ナイフを取り上げると) 静かにしたまえ。

六「おい、僕の友達にひどいことすると、僕が黙っちゃいけないぞ。えい、(日本刀で刑事を斬る)

刑事「うわあつ、・・・なんてことあるわけないだろ。

六「こいつ不死身か？(なおも斬ろうとする)

猿全「六、大人しくしろ。(六を羽交い締めにした)

六は暴れる。

ミネオ「六ちゃん、

六 「ミネオ！（そのうち、白目むいて泡吹いて痙攣し始めた）」

猿全「あ、こいつはいけねえ。医者だ。」

大岡「僕たち、連れていきます。」

六を預かって、大岡と遠山とマリアは行こうとする。

ミネオ「待て、気をつけろ六ちゃん、病院で変な注射をうたれたら終わりだぞ。」

刑事「さあ、君も来るんだ。」

ミネオ「後悔するぞ。君たちには僕は狂人に見えるかも知れないけれど、僕こそあの彗星

Xから地球を救うことの出来る唯一の人間なんだぞ。君たちは知らないだけなんだ。これは全てカリノ博士の陰謀なんだ。嘘だど思っているだろう。僕の妄想だと思っっているだろう。しかし、しかし、もし、誰も彼もが眠っていて、僕だけが覚めていたとしたら、どうするつもりだ。眼を覚ませ。眠っているのは君たちのほうなんだぞ。狂っているのは僕じゃないんだ。この世界のほうなんだ。僕だけが、世界の真理を見ているんだぞ。疑うんだ。その理性を疑ってみろ。僕のことを狂人だと思っただの理性をこそ疑え！空には、彗星が輝いている。この事実をこそ、見ろ！ああ、我は狂人に非ず、世界は我の妄想に非ず、我一人覚めてあり、我一人闘えり、我一人冒険小説に生きてあり。

刑事「もういいだろ。さあ、来るんだ。（ミネオを引っ張って行く）」

大岡と遠山とマリア、六を抱えて出ていく。

猿全はがっくりと膝をつくいた。

トメ子がデン子を連れて下りて来た。

土師沙羅「ああ、一件落着ですか。さて、彗星のほうはどうなったのかな？（テレビのスイッチを入れた）もしぶつかったら、どの程度の被害が出るのかねえ。

定吉「今から六千五百年前、ちょうど白亜紀の頃に恐龍が滅びたんですが、その原因は一個の彗星もしくは隕石の衝突であろうと言われています。最近、メキシコのユカタン半島チクスハブ近くの海岸べりの地層から、隕石もしくは彗星の衝突の跡とみられる幅180キロメートルのクレーターが発見されました。この彗星の直径はおよそ10キロと推定され、秒速19キロの速度で地表に激突したらしいです。その衝撃は七千万メガトンの爆弾に匹敵し、風速130メートルという暴風が吹き荒れ、浮遊物は太陽光線を遮り、酸性の雨が大量に降り注いで、75%の恐龍は死に絶えたと言われています。

土師沙羅「今度の彗星の大きさはどれだけなんだ？

定吉「最も接近する頃には直径20キロ前後です。

土師沙羅「すると何かい、その白亜紀の彗星のざつと二倍かい。

定吉「はい。

土師沙羅「おいおい、冗談じゃねえな。それじゃあ、人類はどうなるんだ？

定吉「もし、衝突すれば、

デン子「私、もうどうなったっていいわ。彗星でも何でもぶつかればいいのよ。

土師沙羅「ちえつ、そうと知ってりや、もう少し・・・ええい、何だかつまらねえ夜を過

ごしちゃったもんですな。こりやあ、あながちあの冒険少年の言ってたことのほうが本当
かも知れせんや。私はもうおいとましますよ。（さっさと帰った）

嵐の前の静けさのごとき静寂が茶の間におとずれた。

デン子「みんな死ねばいいんだ。私もおなかの子供もみんなよ。

トメ子「デン子・・・」

定吉「・・・デン子さん、その子供生んでみませんか。

デン子「え？」

定吉「誰の子供であれ、子供はみんな神さまからの授かりものです。ねえ、親方、もしな

んでしたら、この定吉がデン子さんをお嫁にいただいて、そのおなかの子供、お育て申し
上げますが、如何がでしょうか。

猿全「定吉、おめえ・・・」

トメ子「定吉さん。」

定吉「彗星はぶつかるかも知れないし、それるかも知れない。なあに、ナイフを振り回し

て悪と闘うことばかりが冒険じゃありませんや。デン子さん、子供生んで下さい。定吉が
ちよつと冒険いたします。きつと育ててあげますよ。こういう冒険が、この彗星の夜にあ
ったって、いいじゃないですか。これだって立派な冒険小説ですよ。

外の青白い光が茶の間にまで差し込んできた。

猿全「夜が明けたのかい？」

定吉「さあ、どうでしょう？ 彗星の光かも知れません。

猿全「俺あ、もう何だかよく分からねえよ。ああ、分からねえ、分からねえ。

言いつつ、猿全はチンドン屋の鐘と太鼓を背負って叩き始めた。

定吉はクラリネットを手にすると、猿全について演奏し始めた。

トメ子は三味線を手にしてあとにつづく。

彗星の輝きの中、茶の間でチンドン屋の楽隊が始まったのである。

デン子「わたし・・・」

デン子は何を言わんとしたのやら、そう呟いて、溜め息をひとつもらした。

チンドン屋の演奏はつづく。

1990. 12. 12 第一稿 脱稿

北村 想